

2016年11月21日掲載

歯科のエックス線  
病状全体把握に活用

レントゲン博士によって物質を透過する放射「エックス線」が発見されてから121年。以来、医学はエックス線の発見によって多大な進歩を遂げてきました。エックス線発見の数カ月後にはもう医学的な応用が試みられていたということですから、ナゾの放射線がいかに当時の医学に求められ希望をもたらしていたか、その切実さが伝わってきます。

歯科の分野でも発見から数年で実用化されました。以来、目で見ただけではわからない病巣の検査と診断に、そして治療計画の立案、歯科医療、とあらゆる場面で用いられています。

歯科の病気は、患者さんから症状をお聞きし、口の中をのぞくだけで発見できると思われがちなのですが、実は問診と視診だけで病状の全体を把握できるケースはほんの一握りです。痛みがでないまま歯ぐきの奥で進行する歯周病のみならず、むし歯ですら必ずしも痛みが出るとは限らず、そのために発見が遅れ、歯を失ってしまうことも珍しくありません。そのため、むしろ見えないところまでしっかりと診ることが、歯科の治療では大変重要なのです。

実際、エックス線写真を撮って見ないとわからないことも多く、正確な診断を下し、余分な侵襲を避けてできるだけ小さな治療で治すには、エックス線検査は重要な検査方法になっています。